Wakayama.rbボード Ver.ARIDA 4 説明資料 ver1.0

Wakayama.rb 山本三七男(たろサ)

Wakayama.rbボード Ver.ARIDA 4



特徵

•mrubyを実装したRubyボードです。オブジェクト 指向スクリプト言語Rubyを用いてプログラミング できます。作成したプログラムはシリアル経由 で書き換えることができます。

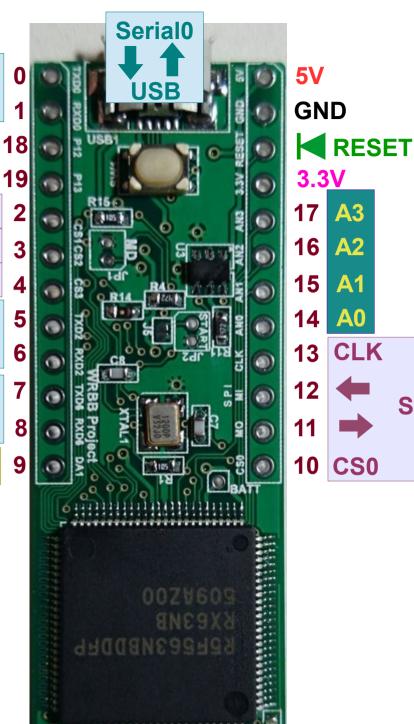
・頭脳にGR-SAKURA搭載のRX63Nを持ち、ピン配置はGR-KURUMI(ほぼ)互換というガジェルネ大好きな作者の趣向がもろに出た一品です。

ハード仕様



```
MCU
   32ビットCPU RX63N(100ピン)
   96MHz
   FlashROM: 1Mバイト
   RAM: 128Kバイト
   データ用Flash: 32Kバイト
ボード機能
   USBファンクション端子 (micro-B)
   1/0ピン 20ピン
   シリアル 3個(+1個可能)
   SPI 1個
   A/D 4個
   RTC
   I2C、PWM、Servoは自由割当てです。
   リセットボタン
   源
```

電 源 5V (USBバスパワード) サイズ 50×18mm



RX63Nピッ

P20

P21

P12

P13

PC0

PC1

PC2

P50

P52

P32

P33

P05

赤文字ピン番は 5Vトレラント

P31

P30

P15

P55

P34

P26

P25

Serial1

SPI

SPI

SPI

Serial2

Serial3

CS1

CS2

CS3

DA1

RX63Nピン番号

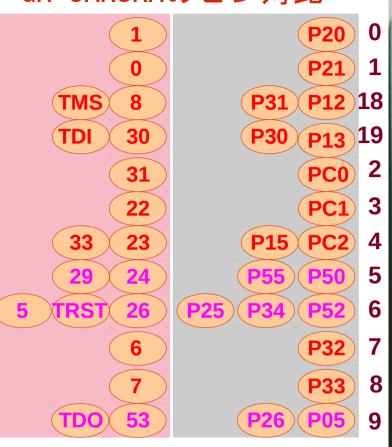
PC5

PC7

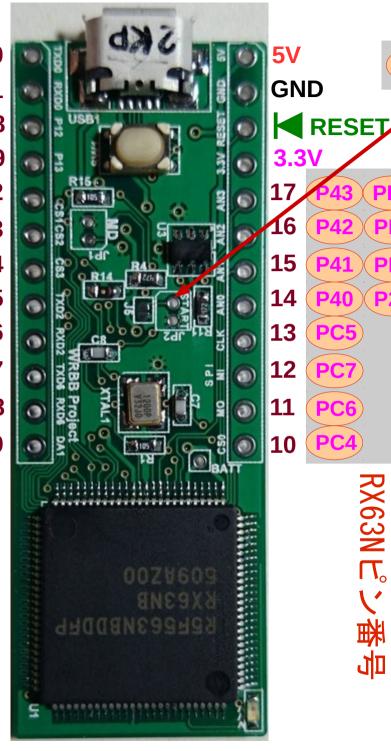
PC4

SPI

GR-SAKURAのピン対比

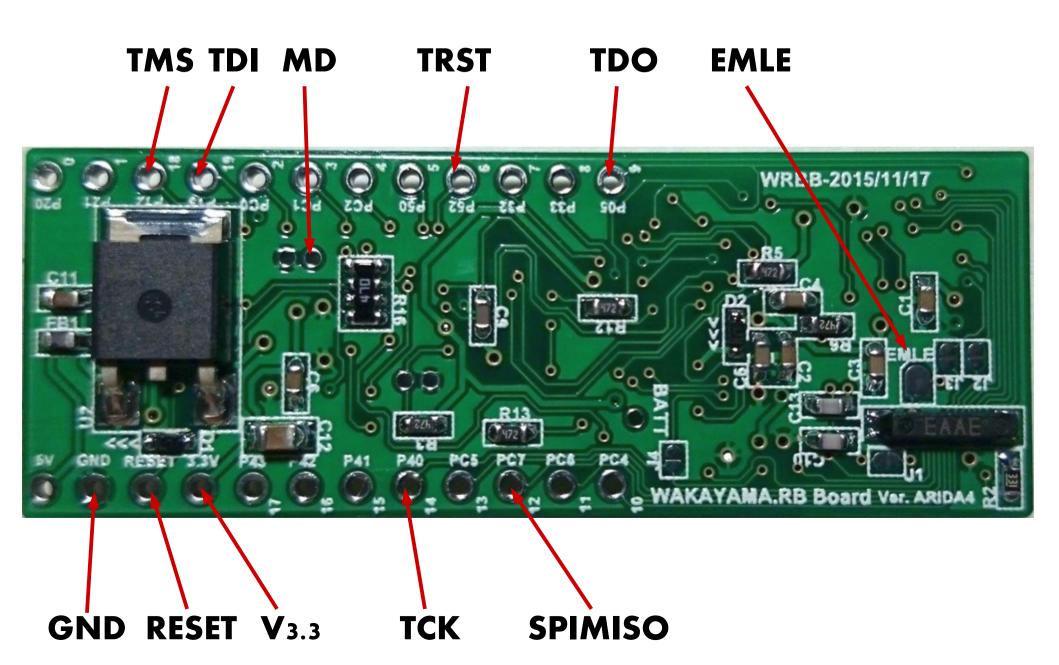


中 細 RX63N L



TC

JTAGの端子



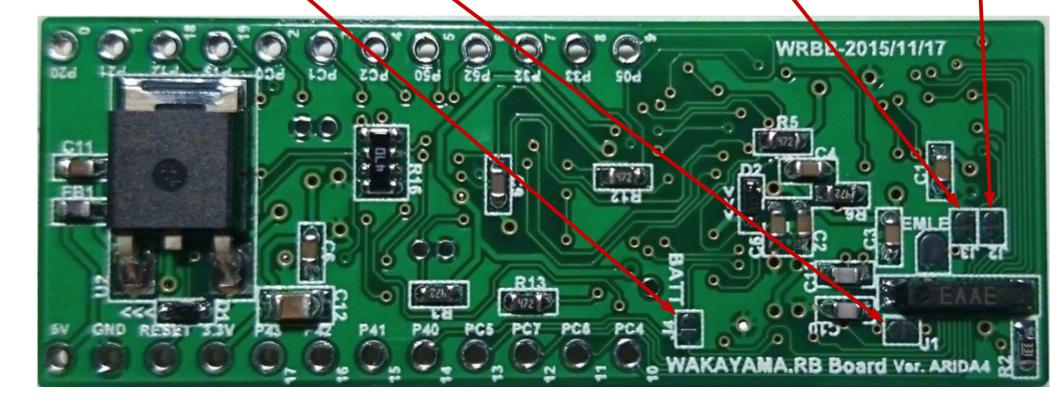
ジャンパの説明

J4 P27(GR-SAKURA-TCK)と14番を接続します。P40ともショートになります。

> J1 PE2(GR-SAKURA-46)と17番を 接続します。P43ともショートにな ります。

J3 PB3と15番を接続します。P41と もショートになります。

> J2 PB5と16番を接続します。P42ともショート になります。



ジャンパの説明

J5 P35(NMI)をGNDに落とします。 電源ON時にデフォルトでGNDにしたいと きに使用します。 JP1 MDをGNDに落とします。 ファームを書き換えるときに、GND とショートさせます。 JP2も同じです。

基本ソフト仕様

カーネルクラス シリアルクラス Serial. begin (number, bps) pinMode (pin, mode) Serial. setDefault (number) digitalRead(pin) Serial print (number, string) digitalWrite(pin, value) Serial.println(number, string) analogRead (number) Serial. read (number) pwm(pin, value) Serial. write (number, buf, len) pwmHz (value) Serial. available (number) analogDac (value) Serial. end (number) delay (value) millis() I2Cクラス micros() I2c. sdascl (sda, scl) led(sw) I2c. write (id. address. data) I2c. read(id, addressL, addressH) システムクラス I2c. begin(id) System. exit() I2c. lwrite (address) System. setrun (filename) 12c. end() System. version(r) I2c. request (id. n) System. push (address, buf, length) I2c. Iread() System. pop (address, length) I2c. freq (Hz) System. fileload() サーボクラス ファイルクラス Servo. attach (ch, pin[, min, max]) MemFile. open (number, filename, mode) MemFile. close (number) Servo. write (ch, angle) MemFile. read (number) Servo. us (ch. us) Servo. read (ch) MemFile. write (number, buf, len) Servo. attached (ch) MemFile. seek (number, byte) Servo. detach (ch) MemFile. copy(src, dst[, mode])

基本ソフト仕様

リアルタイムクロッククラス

Rtc. begin()
Rtc. setDateTime(Year, Month, Day, Hour, Minute, Second)
Rtc. getDateTime()

rubyプログラムの実行

WRBボートは、内部にrubyプログラムを保存できます。ファイル形式は mrbcによりコンパイルしたmrb形式のファイルとなります。

WRBボードは、後述する「電源オンで即実行するモード」に切り替わっていない限り、通常、電源をオンするとコマンドモードとなります。

プログラムの書き込み

WRBボートはPCとUSB経由で接続し、シリアル通信を用いて通信します。 この通信を使って、Rubyのプログラムを書き込んだり、実行したり、WRB ボードからデータをPCに出力したりします。









シリアル通信には、ターミナルソフトを使います。

代表的なものにTeraTermがあります。 CoolTermも使えます。

プログラムの書き込み

きむしゅさんが開発している「Rubic」を使用すると、WRBボート接続したまま楽にプログラム開発ができます。mrbファイルへのコンパイルもRubicが行います。



https://github.com/kimushu/rubic

```
0 0

    Rubic ≡ * New

                        1 Open
                                 ± Save →
                                                                        ⊅$Build
                                                                                 O Run
      #!mruby
      @M = MemFile
      @M.copy("main.mrb", "hello.mrb")
      Serial.begin(0, 115200)
      8. times do |n|
          led k
          k = 1-k
          Serial.println(0, "#{n.to_s}:Hello WRB!")
          delay 300
      end
      led 0
                                Rubic
5:Hello WR8!
6:Hello WRB!
7:Hello WRB!
[Finish main.mrb]
                    COM3 . 6 Info
 Wakayama.rb Board ...

▼ Hide Outpu
```

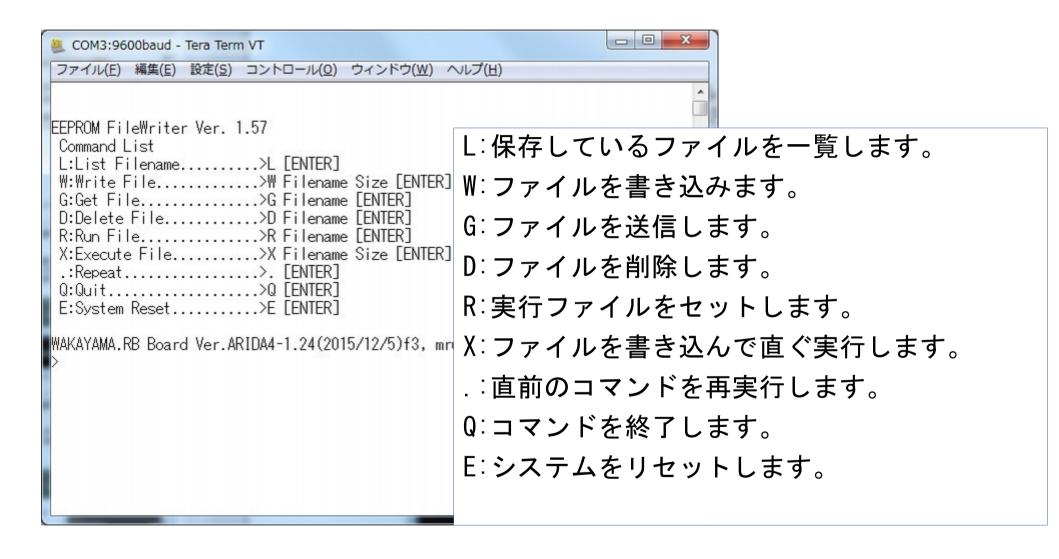
プログラムの書き込み方法

ターミナルソフトを用いてUSBからシリアル通信をしてプログラムを書き込みます。 ENTERキーで画面にコマンドー覧が表示されます。 アルファベット1文字のコマンドを持っています。

COM3:9600baud - Tera Term VT	r
ファイル(\underline{F}) 編集(\underline{F}) 設定(\underline{S}) コントロール(\underline{O}) ウィンドウ(\underline{W}) ヘルプ(\underline{H})	
EEPROM FileWriter Ver. 1.57 Command List L:List Filename>L [ENTER] W:Write File>W Filename Size [ENTER] G:Get File>G Filename [ENTER] D:Delete File>N Filename [ENTER] R:Run File>X Filename [ENTER] X:Execute File>X Filename Size [ENTER] ::Repeat> [ENTER] G:Quit>Q [ENTER] E:System Reset>E [ENTER] WAKAYAMA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3, mruby 1.1.0 (help->H [ENTER]) WAKAYAMA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3, mruby 1.1.0 (help->H [ENTER])	

WRBボードの起動画面

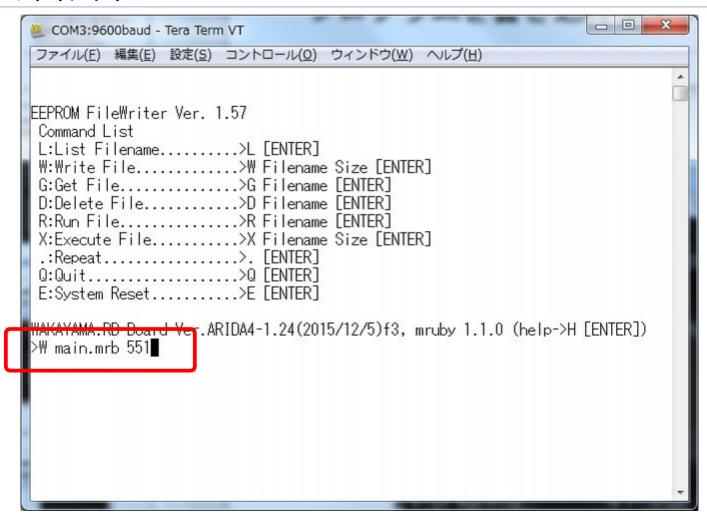
コマンドの種類



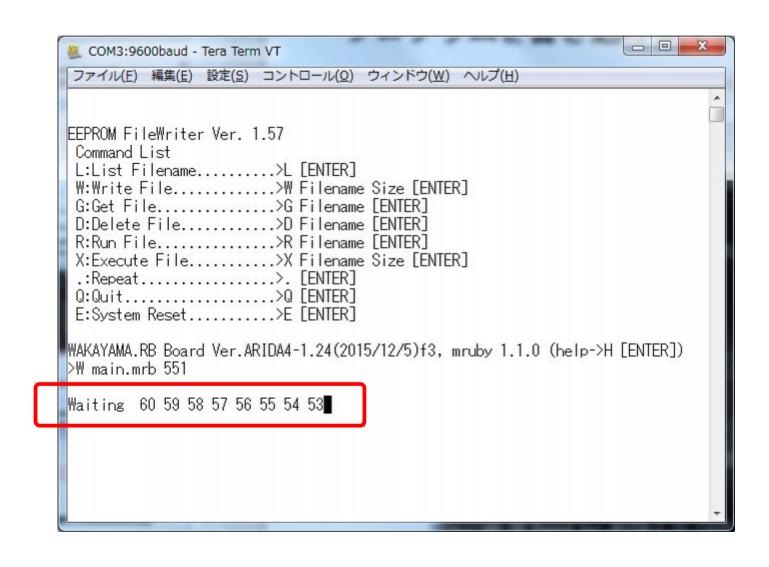
Wコマンドを用いて、mrbファイルを書き込みます。

Wの後にスペースで区切って、ファイル名とファイルサイズを書き、ENTERキーを押します。

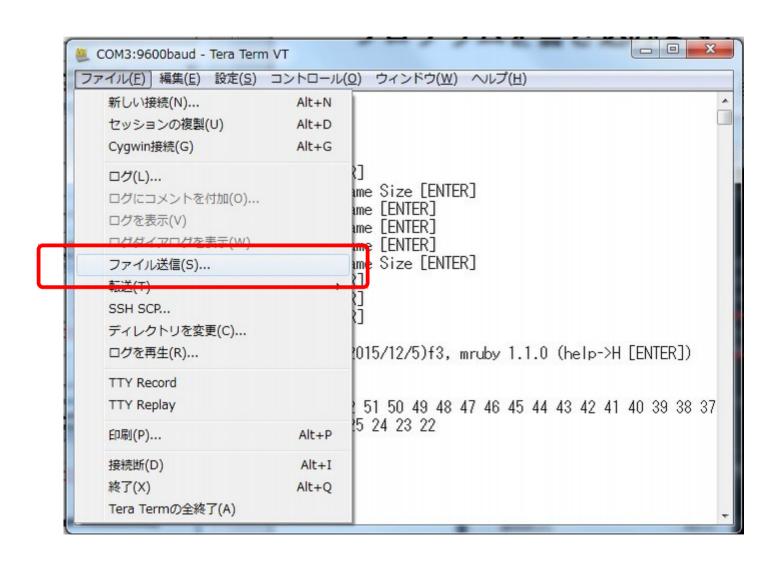
>W ファイル名 ファイルサイズ



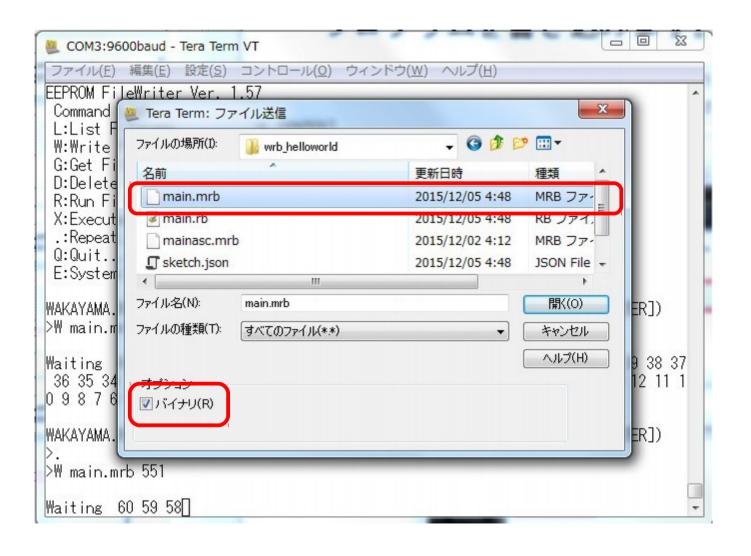
ENTERキーを押すと、カウントダウンが始まります。60sec以内にファイルをバイナリ送信してください。



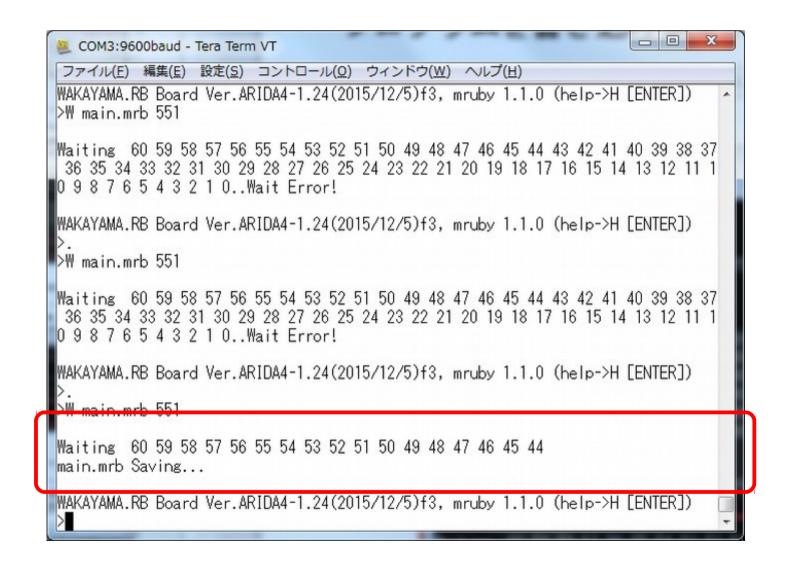
Tera Termの場合、ファイル→ファイル送信 を選択します。



Tera Termの場合、オプションのバイナリにチェックを入れます。 その後、送信するファイルを選択して、開くを押します。

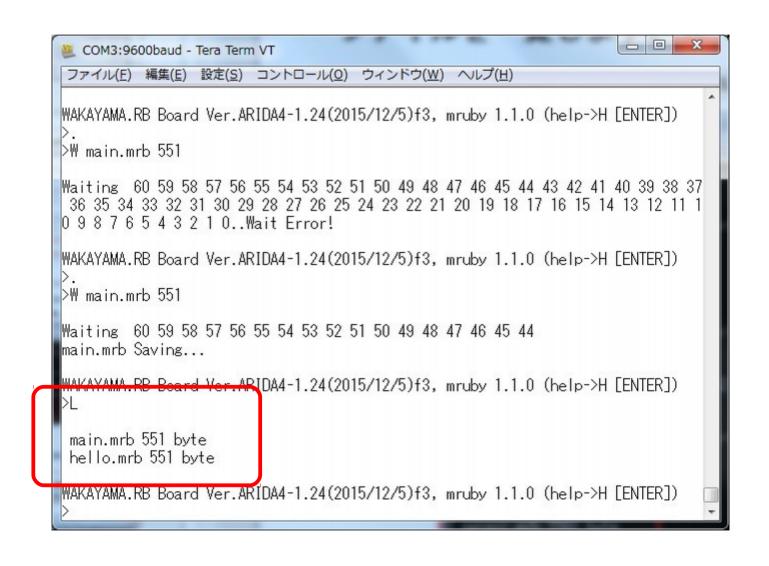


ファイルの書き込みが終了すると、コマンド入力待ちに戻ります。



ファイルを一覧します。(L コマンド)

Lコマンドを入力すると保存されているファイルの一覧が表示されます。



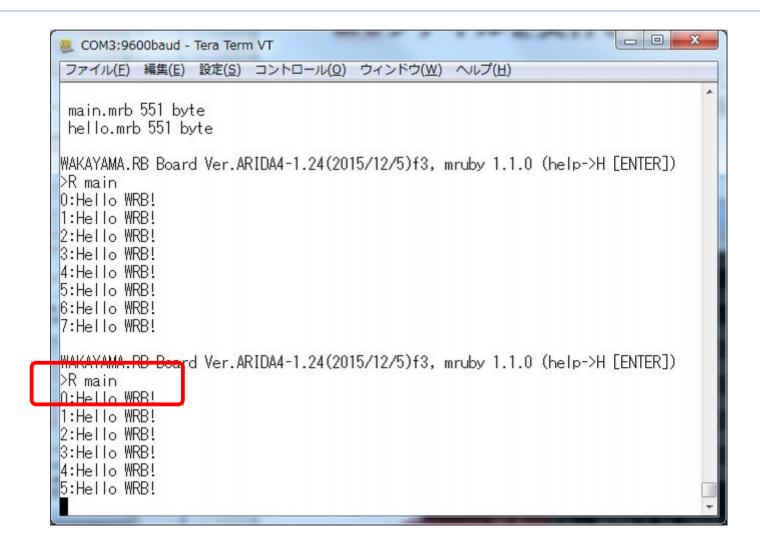
mrbファイルを実行します。(R コマンド)

Rコマンドは、mrbファイルを実行することができます。

Rの後にスペースで区切って、実行させたいファイル名を書き、ENTERを押します。

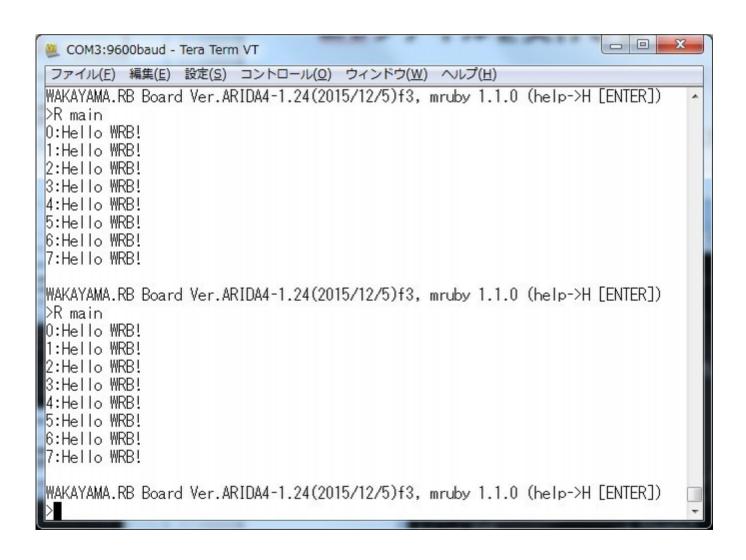
.mrbは省略可能です。

>R ファイル名



mrbファイルを実行します。(R コマンド)

実行が終了するとコマンドモードに戻ります。



プログラムを書き込み実行します。(X コマンド)

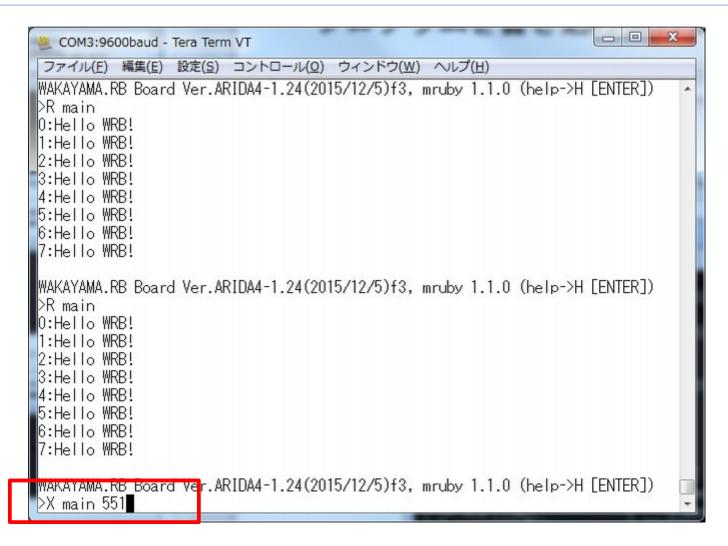
Xコマンドを用いて、mrbファイルを書き込み後直ぐ実行します。

Xの後にスペースで区切って、ファイル名とファイルサイズを書き、ENTERキーを押します。

.mrbはは省略可能です。

>X ファイル名 ファイルサイズ

あとは、Wコマンドと同様です。プログラムの書き込みが終了後、直ぐに実行されます。



ファイルを送信します。(G コマンド)

Gコマンドを用いるとWRBボードに保存されているファイルをPCに読み出すことができます。 Gの後にスペースで区切って、ファイル名を書き、ENTERキーを押します。

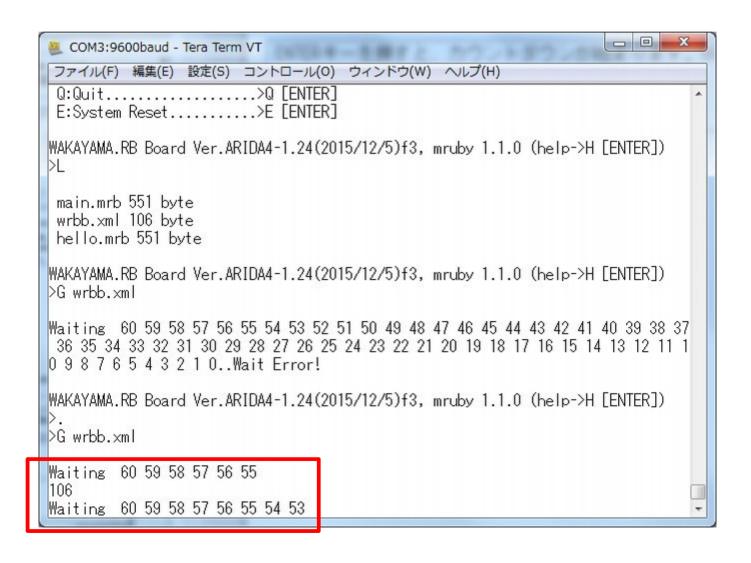
>G ファイル名

```
COM3:9600baud - Tera Term VT
ファイル(F) 編集(E) 設定(S) コントロール(O) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)
WAKAYAMA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3. mruby 1.1.0 (help->H [ENTER])
EEPROM FileWriter Ver. 1.57
Command List
L:List Filename.........>L [ENTER]
W:Write File.....>W Filename Size [ENTER]
G:Get File......SG Filename [ENTER]
R:Run File...... R Filename [ENTER]
X:Execute File......>X Filename Size [ENTER]
E:System Reset..... >E [ENTER]
WAKAYAMA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3, mruby 1.1.0 (help->H [ENTER])
main.mrb 551 byte
wrbb.xml 106 bvte
hello.mrb 551 byte
>G wrbb.xml
```

ファイルを送信します。(G コマンド)

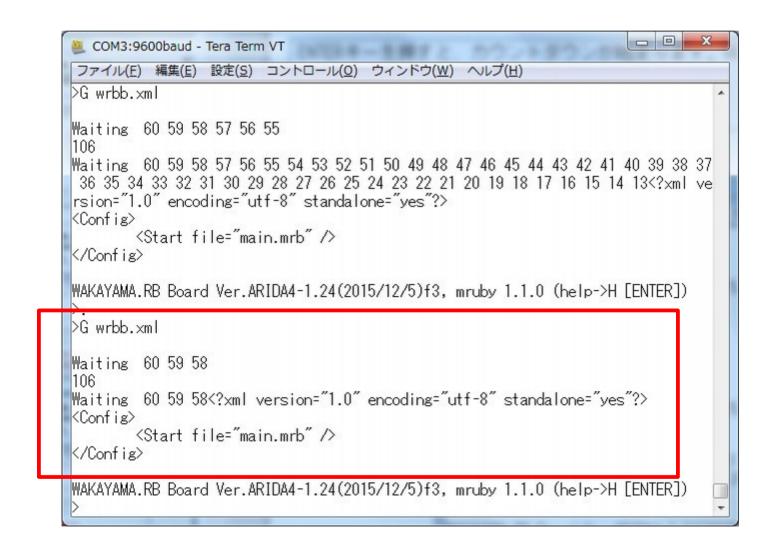
ENTERキーを押すと、カウントダウンが始まります。60sec以内にPCから1バイト送信すると、送信するファイルのファイルサイズが送信されます。

そして、再びカウントダウンが始まります。



ファイルを送信します。(G コマンド)

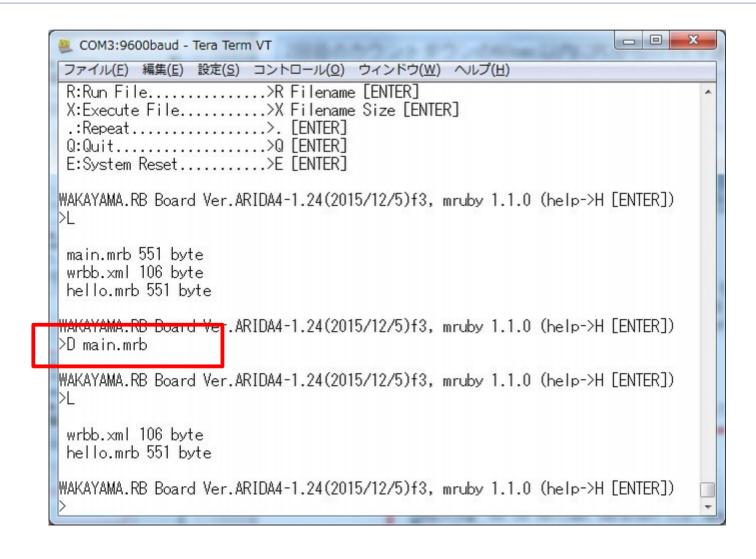
2回目のカウントダウンの60sec以内にPCから1バイト送信すると、指定したファイルが送信されます。 バイナリファイルの場合もバイナリのまま送信されます。



ファイルを削除する。(D コマンド)

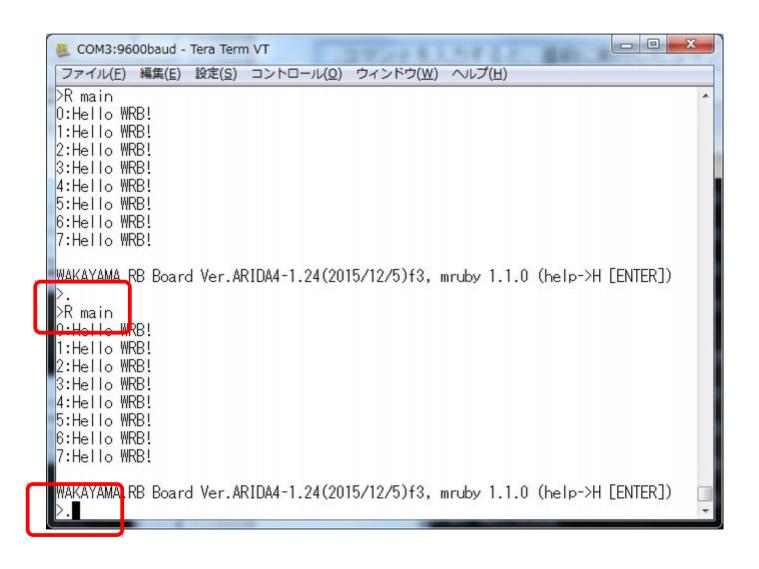
DコマンドはWRBボード保存しているファイルを削除します。 Dの後にスペースで区切って、ファイル名を書き、ENTERキーを押します。

>D ファイル名



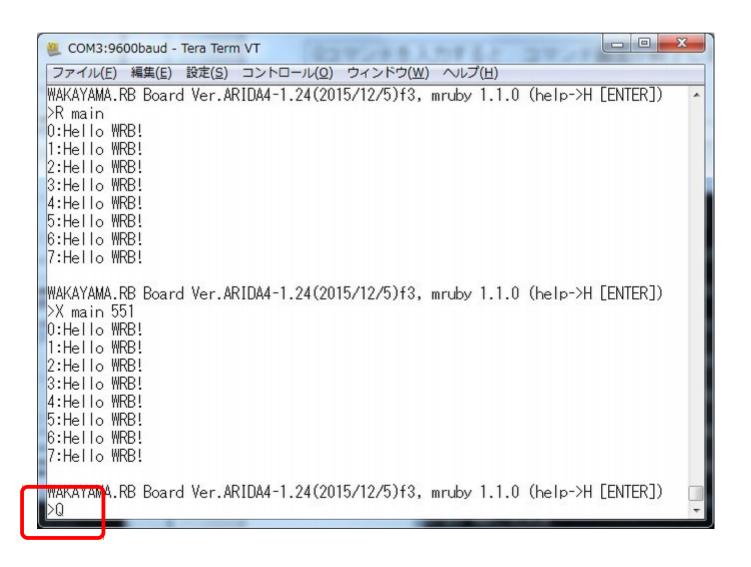
コマンド再実行する。(. コマンド)

. コマンドを入力すると、直前に実行したコマンドを再実行します。



コマンド画面を終了する。(Q コマンド)

Qコマンドを入力すると、コマンド画面が終了します。プログラムの途中で呼び出されている場合は、元のプログラムに戻ります。



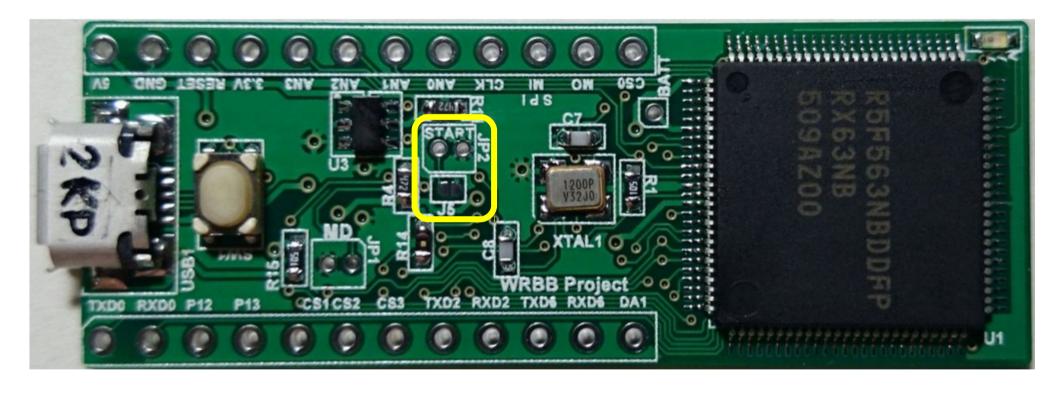
再起動する。(E コマンド)

Eコマンドを入力すると、マイコンを再起動します。

```
COM3:9600baud - Tera Term VT
ファイル(E) 編集(E) 設定(S) コントロール(O) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)
2:Hello WRB!
3:Hello WRB!
4:Hello WRB!
5:Hello WRB!
6:Hello WRB!
7:Hello WRB!
WAKAYAMA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3. mruby 1.1.0 (help->H [ENTER])
EEPROM FileWriter Ver. 1.57
Command List
L:List Filename.......>L [ENTER]
W:Write File.....>W Filename Size [ENTER]
G:Get File......SG Filename [ENTER]
D:Delete File......D Filename [ENTER]
X:Execute File......>X Filename Size [ENTER]
E:System Reset.....>E [ENTER]
WAKAYANA.RB Board Ver.ARIDA4-1.24(2015/12/5)f3, mruby 1.1.0 (help->H [ENTER])
```

電源ONで即実行する方法

電源をONしてプログラムを即実行したい場合は、J5をショートさせるか、JP2にハーフピッチジャンパを取り付けて、ジャンパをショートさせてください。



WRBボードにwrbb.xmlファイルがあり、Startタグで開始プログラム名が書かれているときには、該当プログラムを実行します。無い場合はmain.mrbが実行されます。main.mrbが無い場合は、コマンドモードになります。

rubyプログラム自動実行の仕組み

自動実行する場合のrubyプログラム実行条件 条件(1)

WRBボードは、先ずwrbb.xml ファイルを検索します。wrbb.xmlとはXML形式で書かれたファイルです。

Startタグのfile要素に実行するmrbファイル名を書いておくと、そのプログラムを実行します。

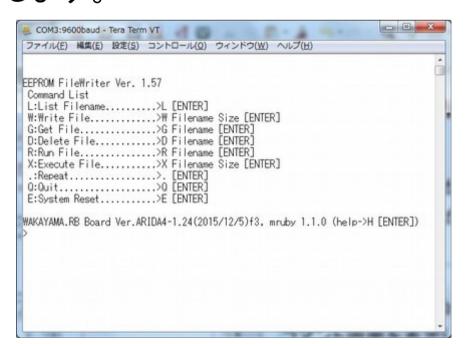
rubyプログラム自動実行の仕組み

条件(2)

wrbb.xml ファイルが見つからない場合は、main.mrbファイルを検索します。 main.mrb ファイルが見つかれば、main.mrbファイルを実行します。

条件(3)

wrbb.xml、main.mrb 両方のファイルが見つからない場合は、USB接続先にコマンド画面を表示します。



rubyプログラム実行の仕組み

rubyプログラム例

LEDを5回 ON/OFFさせます。

```
sw = 1
10.times do
led(sw)
sw = 1 - sw
delay(500)
end
```

以下のように書いても同じです。

```
sw = 1
for i in 1..10 do
    led(sw)
    sw = 1 - sw
    delay(500)
end
```

Hello WAKAYAMA.RB Board!と10回出力されます。

```
10.times do
Serial.println(0,"Hello WAKAYAMA.RB Board!")
delay(500)
end
```

rubyプログラム実行の仕組み

rubyプログラム中に System.setrun 命令を用いて、次に呼び出すrubyプログラムを指定しておくと、実行が終了後、指定されたrubyプログラムが呼び出されます。

```
main.mrb 実行
 sw = 1
 10.times do
  led(sw)
  sw = 1 - sw
  delay(500)
 end
 System.setrun("hello.mrb")
hello.mrb 実行
  Serial.println(0,"Hello WAKAYAMA.RB Board!")
 led(1)
hello.mrb 終了
```

mrbファイルの作成方法

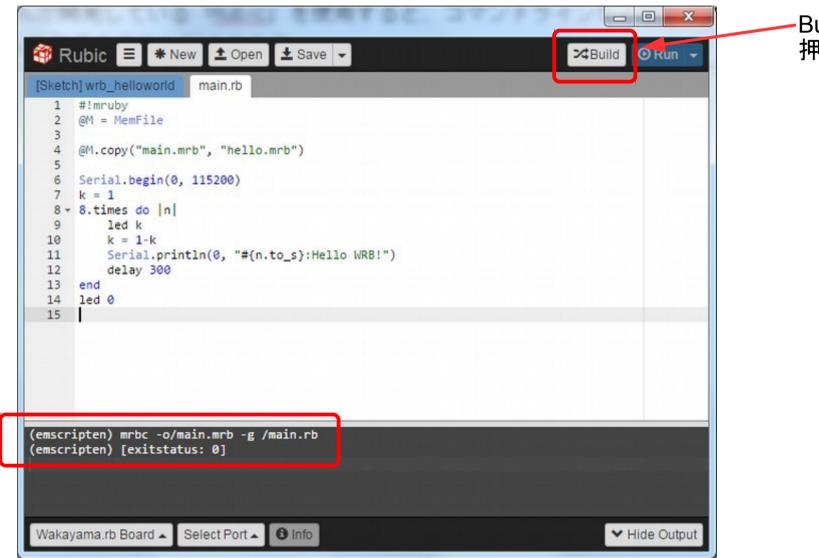
```
コマンドラインからmrbcを実行してください。
$ ./mrbc main.rb
$ ls -l main.mrb
----rwx---+ 1 minao None 865 6月 26 23:29 main.mrb
```

プログラムをデバッグしたい場合は、コンパイルオプションに -g を付けてコンパイルすることをお勧めします。エラーの行番号など詳しいエラーメッセージが出力されます。

\$./mrbc -g main.rb

mrbファイルの作成方法

きむしゅさんが開発している「Rubic」を使用すると、コマンドラインからmrbcを使うことなく mrbファイルを作成することができます。



·Buildボタンを 押します。

PINのモード設定 pinMode(pin, mode)

ピンのデジタル入力と出力を設定します。

pin: ピンの番号

mode: 0: INPUTモード

1: OUTPUTモード

デフォルトは入力(INPUT)モードです。

デジタルライト digitalWrite(pin, value)

ピンのデジタル出力のHIGH/LOWを設定します。

pin: ピンの番号

value: 0: LOW

1: HIGH

デジタルリード digitalRead(pin)

ピンのデジタル入力値を取得します。

pin: ピンの番号

戻り値 0: LOW 1: HIGH

アナログリード analogRead(pin)

ピンのアナログ入力値を取得します。 pin: アナログピンの番号(14, 15, 16, 17)

戻り値 10ビットの値(0~1023)

アナログDAC出力 analogDac(value)

ピンからアナログ電圧を出力します。 value: 10bit精度(0~4095)で0~3.3V

LEDオンオフ led(sw)

基板のLEDを点灯します。

sw: 0:消灯 1:点灯

PWM出力 pwm(pin, value)

ピンのPWM出力値をセットします。

pin: ピンの番号

value: 出力PWM比率(0~255)

PWM周波数設定 pwmHz(value)

PWM出力するときの周波数を設定します。 value: 周波数(12~184999)Hz

ディレイ delay(value)

指定の時間(ms)動作を止めます。

value: 時間(ms)

※delay中に強制的にGCを行っています。

ミリ秒を取得します millis()

システムが稼動してから経過した時間を取得します。 戻り値

起動してからのミリ秒数

マイクロ秒を取得します micros()

システムが稼動してから経過した時間を取得します。 戻り値 起動してからのマイクロ秒数

```
pinMode(4, 0)
pinMode(5, 1)

x = digitalRead(4)
digitalWrite(5, 0)

10.times do
  led(1)
  delay(1000)
  led(0)
  delay(1000)
end
```

メソッドの説明 システムクラス

システムのバージョン取得 System. version([R])

システムのバージョンを取得します。 R: 引数があればmrubyのバーションを返します。

プログラムの終了 System.exit()

プログラムを終了させます。 System.setRunにより次に実行するプログラムがセットされていれば、そのプログラムが実行されます。

実行するプログラムの設定 System. setRun(filename)

次に実行するプログラムを設定します。 filename: mrbファイル名

管理カーネルの呼び出し System. fileload()

システムの管理カーネル「EEPROM File Writer」を呼び出します。

メソッドの説明 システムクラス

フラッシュメモリに書き込み System. push (address, buf, length)

フラッシュメモリに値を書き込みます。

address: 書き込み開始アドレス(0x0000~0x00ff)

buf: 書き込むデータ

length: 書き込むサイズ(MAX 32バイト)

戻り値 1:成功 0:失敗

※ここに書き込んだ値は、電源を切っても消えません。

フラッシュメモリから読み出し System. pop(address, length)

フラッシュメモリから値を読み出します。

address: 読み込みアドレス(0x0000~0x00ff)

length: 読み込みサイズ(MAX 32バイト)

戻り値

読み込んだデータ分

メソッドの説明 システムクラス

使用例

```
#アドレス0x0000から0x0005に{0x3a, 0x39, 0x38, 0x00, 0x36}の5バイトのデータを書き込みますbuf = 0x3a. chr+0x39. chr+0x38. chr+0x0. chr+0x36. chr
```

System. push (0x0000, buf, 5)

#アドレス0x0000から5バイトのデータを読み込みます ans = System. pop(0x0000, 5)

System. setRun('sample.mrb') #次に実行するプログラム名をセットします

System. exit() #このプログラムを終了します。

シリアル通信の初期化 Serial.begin(num, bps)

シリアル通信を初期化します。シリアル通信を私用する場合は、初めに初期化を行ってください。

num: 初期化する通信番号

0:USB

1:0ピン送信/1ピン受信

2:5ピン送信/6ピン受信 3:7ピン送信/8ピン受信

bps: ボーレート(bps)基本的に任意の値が設定できます。

シリアル通信のデフォルト通信番号の設定 Serial setDefault (num)

シリアル通信のデフォルト通信番号を設定します。

num: 通信番号(番号はSerial.begin参照)

※システム内部でエラーなどが発生した時に、出力されるメッセージの出力先となります。

シリアルポートへの出力 Serial.print(num[, str])

シリアルポートに出力します。

num: 通信番号(番号はSerial begin参照)

str:文字列。省略時は何も出力しません設定できます。

シリアルポートへの出力(\frac{\println(num[, str])

シリアルポートに¥r¥n付きで出力します。 num: 通信番号(番号はSerial.begin参照)

str: 文字列。省略時は改行のみ

シリアル受信チェック Serial.available(num)

シリアルポートに受信データがあるかどうか調べます。

num: 通信番号(番号はSerial.begin参照)

戻り値

シリアルバッファにあるデータのバイト数。0の場合はデータなし。

シリアルポートから1バイト取得 Serial. read(num)

シリアルポートの受信データを1バイト取得します。

num: 通信番号(番号はSerial.begin参照)

戻り値

OxOO~OxFFの値、データが無いときは-1が返ります。

シリアルポートへデータ出力 Serial. write (num, buf, len)

シリアルポートにデータを出力します。

num: 通信番号(番号はSerial begin参照)

buf: 出力データ

len: 出力データサイズ

戻り値

出力したバイト数

シリアル-ポートを閉じます Serial.end(num)

シリアルポートを閉じます。 num: 通信番号(番号はSerial.begin参照)

```
Serial.begin(0, 115200)
                           #USBシリアル通信の初期化
Sw = 0
while (true) do
 while (Serial. available (0) > 0) do #何か受信があった
   c = Serial.read(0).chr #1文字取得
   Serial.print(0, c)
                                #エコーバック
 end
 #LEDを点滅させます
 led(Sw)
 Sw = 1 - Sw
 if (Serial, available (0) > 0) then
   System. fileload()
 end
 de l ay (500)
end
```

```
Serial.begin(1, 115200) #0ピンと1ピンのシリアル通信初期化
data = 0x30.chr + 0x31.chr + 0.chr + 0x32.chr + 0x33.chr + 0x0d.chr + 0x0a.chr
Serial.write(1, data, 7) #1番ポートに7バイトのデータを出力
System.exit()
```

メソッドの説明 MemFileクラス(Flashメモリをメディアのように扱うクラス)

ファイルのオープン MemFile.open(number, filename[, mode])

ファイルをオープンします。

number: ファイル番号 0 または 1 filename: ファイル名(8.3形式)

mode: 0:Read, 1:Append, 2:New Create

戻り値

成功:番号、失敗:-1

※同時に開けるファイルは2つまでに限定しています。

ファイルのクローズ MemFile.close(number)

ファイルをクローズします。

number: クローズするファイル番号 0 または 1

ファイルの読み出し位置に移動 MemFile.seek(number, byte)

Openしたファイルの読み出し位置に移動します。

number: ファイル番号 0 または 1

byte: seekするバイト数(-1)でファイルの最後に移動する

戻り値

成功: 1. 失敗: 0

メソッドの説明 MemFileクラス(Flashメモリをメディアのように扱うクラス)

Openしたファイルからの読み込み MemFile.read(number)

Openしたファイルから1バイト読み込みます。

number: ファイル番号 0 または 1

戻り値

0x00~0xFFが返る。ファイルの最後だったら-1が返る。

Openしたファイルにバイナリデータを書き込む MemFile.write(number, buf, len)

Openしたファイルにバイナリデータを書き込みます。

number: ファイル番号 0 または 1 buf: 書き込むデータ

len: 書き込むデータサイズ

戻り値

実際に書いたバイト数

メソッドの説明 MemFileクラス

```
MemFile. open (0, 'sample. txt', 2)
 MemFile write (0, 'Hello mruby World', 17)
  data = 0x30. chr + 0x31. chr + 0. chr + 0x32. chr + 0x33. chr
 Serial.write(0, data, 5)
MemFile.close(0)
Serial. begin (0, 115200) #USBシリアル通信の初期化
MemFile. open (0, 'sample. txt', 0)
while (true) do
  c = MemFile.read(0)
  if (c < 0) then
    break
  end
  Serial.write(0, c.chr, 1)
end
MemFile.close(0)
System. exit()
```

I2C通信を行うピンの初期化 I2c. sdascl (sda, scl)

I2C通信を行うピンを設定します。

sda: データピン scl: クロックピン

アドレスにデータを書き込みます I2c. write (device ID, address, data)

アドレスにデータを書き込みます。

deviceID: デバイスID

address: 書き込みアドレス

data: データ

戻り値

0: 成功

1: 送信バッファ溢れ

2: スレーブアドレス送信時にNACKを受信

データ送信時にNACKを受信

4: その他のエラー

アドレスからデータを読み込み I2c. read(deviceID, addressL[, addressH])

アドレスからデータを読み込みます。

deviceID: デバイスID

addressL: 読み込み下位アドレス addressH: 読み込み上位アドレス

戻り値

読み込んだ値

I2Cデバイスに対して送信を開始するための準備をする: I2c.begin(deviceID)

I2Cデバイスに対して送信を開始するための準備をします。この関数は送信バッファを初期化するだけで、実際の動作は行わない。繰り返し呼ぶと、送信バッファが先頭に戻る。

deviceID: デバイスID 0~0x7Fまでの純粋なアドレス

デバイスに対してI2Cの送信シーケンスの発行 I2c.end()

デバイスに対してI2Cの送信シーケンスを発行します。I2Cの送信はこの関数を実行して初めて実際に行われる。

戻り値

0: 成功

1: 送信バッファ溢れ

2: スレーブアドレス送信時にNACKを受信

3: データ送信時にNACKを受信

4: その他のエラー

デバイスに受信シーケンスを発行しデータを読み出す I2c. request (address, count)

デバイスに対して受信シーケンスを発行しデータを読み出します。

address: 読み込み開始アドレス

count: 読み出す数

戻り値

実際に受信したバイト数

送信バッファの末尾に数値を追加する I2c. lwrite(data)

送信バッファの末尾に数値を追加します。

data: セットする値

戻り値

送信したバイト数(バッファに溜めたバイト数)を返す。

送信バッファ(260バイト)に空き容量が無ければ失敗して0を返す。

デバイスに受信シーケンスを発行しデータを読み出す I2c. | read()

デバイスに対して受信シーケンスを発行しデータを読み出します。 戻り値

読み込んだ値

周波数を変更する I2c. freq(Hz)

周波数を変更します。

Hz: クロックの周波数をHz単位で指定する。

有効な値は1~200000程度。基本的にソフトでやっているので400kHzは出ない。

```
@APTemp = 0x5D # 0b01011101 圧力・温度センサのアドレス
Serial.begin(0, 115200) #USBシリアル通信の初期化
#センサ接続ピンの初期化(17番SDA, 16番SCL)
I2c. sdascl (17. 16)
de lay (300)
#気圧と温度センサの初期化
@APTemp = 0x5D
                                   # 0b01011101
APTemp CTRL REG1 = 0x20 # Control register
APTemp SAMPLING = 0xA0 # A0:7Hz 90:1Hz
# 7Hz
I2c. write (@APTemp, APTemp CTRL REG1, APTemp SAMPLING)
de lay (100)
#気圧を取得します ------
#Address 0x28, 0x29, 0x2A, 0x2B, 0x2C
v0 = I2c. read(@APTemp, 0x28, 0x29)
v1 = I2c. read(@APTemp. 0x2A)
a = v0 + v1 * 65536
              # hPa単位に直す
a = a / 4096.0
#温度を取得します ------
v2 = I2c. read(@APTemp. 0x2B. 0x2C)
if v2 > 32767
    v2 = v2 - 65536
end
t = v2 / 480.0 + 42.5
Serial.println(0, a.to_s + "," + t.to_s)
```

```
Serial.begin(0, 115200)
                              #USBシリアル通信の初期化
#センサ接続ピンの初期化(17番SDA, 16番SCL)
I2c. sdascl (17, 16)
de lay (300)
#気圧と温度センサの初期化
@APTemp = 0x5D
                                        # 0b01011101
APTemp_CTRL_REG1 = 0x20 # Control register
APTemp SAMPLING = 0xA0 # A0.7Hz 90.1Hz
I2c. write (@APTemp. APTemp_CTRL_REG1, APTemp_SAMPLING) # 7Hz
de lay (100)
#Address 0x2B. 0x2C
I2c. begin (@APTemp)
I2c. lwrite(0x2B)
I2c. end()
I2c. request (@APTemp, 1)
datL = I2c. Iread()
I2c. begin (@APTemp)
I2c. lwrite(0x2C)
12c. end()
I2c. request (@APTemp. 1)
datH = I2c. read()
v = datL + datH * 256
if v > 32767
 v = v - 65536
end
t = v / 480.0 + 42.5
Serial.println(0, t.to s)
```

メソッドの説明 サーボクラス

サーボ出力を任意のピンに割り当てます Servo.attach(ch, pin[,min,max])

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

pin: 割り当てるピン番号

min: サーボの角度が0度のときのパルス幅(マイクロ秒)。デフォルトは544 max: サーボの角度が180度のときのパルス幅(マイクロ秒)。デフォルトは2400

サーボの角度をセットします: Servo. write(ch, angle)

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

angle: 角度 0~180バイスに対して受信シーケンスを発行しデータを読み出します。

サーボモータにus単位で角度を指定します: Servo. us (ch. us)

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

us: 出力したいパルスの幅 1~19999, 0で出力 OFF

サーボモータに与えられるパルスは20ms周期で、1周期中のHighの時間を直接指定する。 実質的にPWM出力。連続回転タイプのサーボでは、回転のスピードが設定することができる。

最後に設定された角度を読み出します: Servo. read(ch)

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

戻り値

マイクロ秒単位。ただし us(ch) で与えた値は読みとれません。

メソッドの説明 サーボクラス

ピンにサーボが割り当てられているかを確認します: Servo. attached (ch)

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

戻り値

).... 1: 割り当てられている 0: 割り当てはない

サーボの動作を止め、割り込みを禁止します: Servo. detach(ch)

ch: サーボのチャネル 0~9まで指定できます

メソッドの説明 サーボクラス

```
g_pos = 0
g_inc = 10

Serial.begin(0, 115200) #USBシリアル通信の初期化
#8番ピンをサーボ用ピンに割り当てる。
Servo.attach(0, 8)
Servo.write(0, g_pos) #サーボの角度設定

#サーボを10度ずつ50回動かす
50.times do
    delay(100)
    g_pos = g_pos + g_inc
    Servo.write(0, g_pos)
    if(g_pos >= 180 || g_pos <= 0) then
        g_inc = g_inc * -1
    end
end
```

メソッドの説明 リアルタイムクロッククラス

RTCを起動します: Rtc. begin()

戻り値

0: 起動失敗 1: 起動成功

2: RTCは既に起動していた

RTCの時計をセットします: Rtc. setDateTime(Year, Month, Day, Hour, Minute, Second)

Year: 年 0-99 Month: 月 1-12 Day: 日 0-31 Hour: 時 0-23 Minute: 分 0-59 Second: 秒 0-59

戻り値 0: 失敗 1: 成功

RTCの時計を取得します: Rtc. getDateTime()

戻り値

Year: 年 Month: 月 Day: 日 Hour: 時 Minute: 分 Second: 秒

メソッドの説明 リアルタイムクロッククラス

```
Serial.begin(0, 115200) #USBシリアル通信の初期化

Rtc.setDateTime(2015, 6, 27, 0, 0, 1)

10.times do|i|
    led(i % 2)
    year, mon, da, ho, min, sec = Rtc. getDateTime()
    Serial. println(0, year. to_s + "/" + mon. to_s + "/" + da. to_s + " " + ho. to_s + ":" + min. to_s + ":" + sec. to_s)
    delay(500)
end
```